

ラマダーンにおける食

ラマダーン月（イスラーム暦の第9月）で、断食を行なうムスリムたちは、断食が明けると日没を楽しみにしている。一方で、ムスリムでない人間にとってみれば、ムスリムが多い土地で暮らすにはなかなか根気と勇気が必要であることも確かである。そして、生活のスタイルの変更を余儀なくされることもある。

その一つに食がある。多くのムスリムたちが日中に飲食をしないため、レストランは基本的に閉まっている。ムスリムたちが日中にレストランを訪れないことはもちろんだが、調理側もムスリムである。日中に営業していても、客はほとんど来ないだろうが、それ以上に断食月だという点からも食堂は閉まってしまう。

ラマダーンとはいえ、すべての人が断食するわけではない。子どもや高齢者などの年齢的理由、健康上の理由に加えて、月経中や妊婦であるという理由から断食しない者もいる。多くの者が断食しているとはいえ、やはり断食しない者もいる。ところが、国によっては、エジプトのように、日中の食堂やカフェの営業を取りやめるように促す国もあれば、サウジアラビアやUAEのように、公共の場所で飲食をしないことを法律で定めている国もある。

筆者自身の経験からも、多くのムスリムが断食しているなかで、自分がペットボトルを取り出して水を飲む行為は、どことなく後ろめたいところがある。同様に、断食していない人々がどうやって飲食をしているのかと言えば、誰にも見られないように飲食をしているというのが現状ではないかと思われる。ただし、ラマダーン期間中に40度を超える炎天下でも、肉体労働者たちが作業をしている現場がある。肉体労働に勤しんでいる彼らが、日中に水を飲んでるところを目撃したことがある。水分補給をしないと生命に危険が及ぶ状況にある彼らは、ムスリムであるといえども飲食せざるをえないのだろう。

断食明けで混み合うレストラン

日没が近づくにつれて、人々はそわそわしはじめる。夕食を食べる人との待ち合わせに向かうからだ。筆者のエジプト留学中、レストランはどこも大混雑であった。人々は連れ立って断食明けの食事（イフタル）を共にする。普段は夜遅くまで営業しており、いつ訪れてもすぐに食べられるレストランでさえも、期間中は予約客のみを受け付けており、彼らが食べ終わった夜8時過ぎには閉店していた。私がそのレストランで夕食を



シャッターが下りる学生食堂
(マレーシア国際イスラーム大学、2011年)

食べようとするならば、食事のタイミングは、ムスリムたちと同じタイミングしかない。

また、マレーシア国際イスラーム大学での留学中、ラマダーン月の学生食堂は、一部の食堂を除いて営業していなかった。もちろん学内には多くの学生がいるにもかかわらず、食堂の多くは休業してしまう。そのため、どこで食事するかを考えることが重要になってくる。幸いなことに、私は車をもっている友人に、ラマダーン中は夕方から営業する学内の食堂まで乗せてもらって食事を確保していた（とはいえ、片道3km弱の場所にあった）。

聖なる断食月

イスラームには、「聖なる月」に定められた4カ月がある。聖なる月とは、1年のうちの第1・7・11・12月で、実際の状況はともかく、戦闘が禁止されることになっている。それとは別に、ラマダーン月は、断食に加え、聖典クルアーンが最初に啓示された聖なる月である。クルアーンは、西暦の622年の第9月に啓示されたと言われている。

預言者ムハンマドは、未亡人であったハディースと結婚後、ヒラー山で瞑想にふけるようになる。瞑想の最中に、天使ガブリエル（ジブリール）が現れて、啓示を下したと伝えられている。最初の神の啓示は、「誦め」（イクラウ）であったと言われている。

天使が彼に現われて「誦め」と命じた。これに対して彼は「誦むことができません」と答えた。そこで天使は彼を捉え、苦しみに打ちひしがれるほど激しく羽交い絞めにしてから放し、また「誦め」と言った。彼は「誦むことができません」と答えた。すると天使は三度目に彼を捉え、苦しみに打ちひしがれるほど激しく羽交い絞めにしてから放し、また「誦め、『創造主』なる主の御名において。いとも小さき凝血から人間を創り給う」と。誦め、『汝の主はこよなく有難い方』と」（クルアーン第96章1～3節）と言った。

預言者ムハンマドは文盲であったと言われている。「誦め」（イクラウ iqra'）という言葉は、「誦まれるもの」を意味するアラビア語「クルアーン」（Qur'ān）と語根（q-r-'）を同じくする。

最初の啓示が、ラマダーン月の何日だったかについては諸説ある。啓示が最初に下された日は、「ライラト・ル＝カドル」と呼ばれ、「運命の日」や「威力の日」と翻訳される。月の最後の10日間のうちの奇数日、23日、25日、あるいは29日という説があるが、23日に設定されるのが一般的なようである。

非ムスリムのラマダーン準備

日頃は、お酒を飲むムスリムであっても、断食月は断酒するというムスリムも多い。もちろん、中東諸国にも酒屋はあるが、ラマダーン月は休業してしまう。そのため、ラマダーン月が始まる前に、1カ月分のアルコールを買い出しておく必要がある。ラマダーン月の前は、ムスリムではない者にとっても、準備で慌ただしくなるのである。

[註]

(1) 『ハディース イスラーム伝承集成』(上)、牧野信也訳、中央公論社、1993年、16頁。